
能力者少女の受難

なず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

能力者少女の受難

【Nコード】

N0847X

【作者名】

なす

【あらすじ】

孤児院育ちで、ごく普通の子供中学生だった幸さいち。

過去のゴタゴタも忘れかけ、平和に学生生活を謳歌していたが、ある日引き取り手が見つかる。

けれどその引き取り手にはある秘密があつて！？

作者の趣味と勢いとノリで出来ております！ 更新遅めはあしからず……。

ブログ（前書き）

初投降です！

今回はブログですが、頑張って進めますのでよろしくお願
い
します。

プロローグ

どうしてこうなった、と本気で叫びたくなつたのははじめてだ。
私の目の前に座るのは、胡坐をかいた二十代の男性と、私と同じ
年くらいの男の子。

彼らは別に不審者でもないし、むしろいい人たちだ。叫ぶ原因で
はない。

OK、そこまではいい。人物は全然問題ない。

問題は背景だ。

なんで。

なんで。

「な……っんで、ひとりで湯呑みが浮くの本が飛ぶのダンスが動
くのーっ!?!? なにこれ昼間なのにポルターガイストおお!?!?」

思わず叫ぶ私を、男の子は溜め息をつきながら、男性は爆笑しな
がら見ていた。

ブログ（後書き）

どうでしたでしょうか……！
次回も近いうちに更新します。
ありがとうございます！

* 十月五日 訂正しました *

人助けはいい事です(前書き)

二話目投降ですー!

今回もよろしくお願いします!

人助けはいい事です

健全で優秀なる中学一年生の私は帰宅部なので、三時には下校していた。

返されたテストが中々の高得点だったので、スキップでもしたい気持ちと緩む頬を抑えて歩き、もう少しで我が家というところで、ふと視界にうずくまる人影を見つけた。

黒いＴシャツに淡い紺色のダメージジーンズの男の子。たぶん、同世代。

顔をしかめて何を見下ろしているのかと視線を辿れば、右膝から血が流れていた。

「ねえちよつと、大丈夫？」

思わず声をかけると、黒髪を揺らしながら彼が顔を上げた。
わ、カッコいい。

「あ……すまん、ここ邪魔か」

「いや、そうじゃなくてキミの怪我のことを言ってるの。血い出るじゃない」

近寄ってみれば、ジーンズの生地が赤色に染まっている。傷も、抉れたようになっていて深そうだ。

「ちよつと待ってて」

家に一旦帰り、鞆を放り投げて救急箱を引っ掴む。

「どうしたの」と声をかけてきた”弟”に、人助けよと一言だけ告げた。

走って戻ると、男の子はぼかんとしながら座っていた。

「ほら裾まくって」

「え、あ、ああ」

何事かと焦りながらもいう通りにする男の子を尻目に、救急箱をあさる。

消毒液とガーゼとテープと……あ、あった、包帯。

「なあ」

「あ、まくった？ はいじゃあ覚悟してね」

「え」

びど。

「うっぎゃあああ！？」

消毒液をたっぷり染み込ませたガーゼを押しあてると、クールにしていた男の子が叫ぶ。

「ごめんね、痛いよね。けど男でしょ、我慢我慢」

「……………て、え」

「もうちよつとだから……………よし終わり！」

ガーゼを離すと、男の子はほうと息をはいた。うん、お疲れさまです。

新しいガーゼを傷にあててテープで貼り、くるくると包帯で巻く。あんまり巻きすぎたら動きにくいから注意。

「はいできた。一応手当てしといたけど傷がちよつと深めだったから、痛かったら病院に行ったほうがいいと思うよ」

「あ……………ありがとう」

モゴモゴと小さく礼を言った男の子に笑ってから、私は救急箱を片手に帰宅した。

うん、人助けはいい事だ。

《目標発見》

「……………わかってるよ畜生。だから、開くな」

彼は右目を隠すように掌を押し付け、忌々しげに呟く。

「また動くのか……………めんどくせえ」

立ち上がるうと膝に力を入れると、鈍く痛みが走る。大した痛みではなかったが、彼は驚いて尻餅をついてしまった。

「い……って」

そういえば怪我をしていたのだと思い出した彼は、携帯を取り出してどこかへ電話をかけた。

『はいよ』

「迎えに来い」

ワンコールで出た相手に素っ気なく告げ、すぐさま切る。

元はといえばあいつの所為だからな、と誰にともなく言い訳してから、彼はおもむろに治療してもらった膝に触れる。

「名前、聞き忘れたな」

人助けはいい事です（後書き）

次回からは本格的に話が進むかと。
ありがとうございます！

十月五日 訂正しました

変化は唐突です（前書き）

前回のあとがきで言っていたほど話が進みませんでした……。期待してくださっていた方、もしいらっしゃったならすみません！
じ、次回こそは……！

変化は唐突です

「おかえり、幸さいち」

家に帰ると、美奈さんが迎えてくれた。

美奈さんはこの孤児院、たんぽぽ院のお母さんのような存在だ。

「ただいま、美奈さん。みんなもただいま」

「おかえりー！」

わらわらと寄ってくるちびっこ達は、私の”弟”と”妹”たちだ。血の繋がりはなくても一緒に暮らすなら家族だ、と美奈さんは入ってきた子どもたちに教え、美奈さんのことはお母さん、最年長の私のことはお姉さんと思うように言っている。

私も小さなみんなのことを、かわいい弟・妹たちだと思っている。我が家はみんな仲良しだ。

「幸姉ちゃん、ほらこれ見てー！」

「ん？ おお、似顔絵だ！ 上手いね」

「えへへ」

はにかむ”妹”の頭を撫でていると院内にコール音が響いた。慌ただしく美奈さんが出る。空気を読んだ私たちは、足音をたてずに二階の広い子ども部屋に引っ込んだ。

私が着替えている内に誰かが人生ゲームを出してきたらしく、下には響かない程度に騒いでいた。どの年代でも人気のゲームだなあ。私も輪に加わり、大富豪になったりリストラされたりと楽しんでいくうちに、午後七時になっていた。さすがに二時間も話していないだろうと下に降りると、嬉しそうな、それでいて悲しそうな複雑な顔をした美奈さんが夕飯を並べていた。

今晚は炒飯に餃子、そしてサラダ。相も変わらず美味しそうな料理たちだったが、美奈さんの表情が気になって仕方ない。

目線があうと、ちよつと来てとばかりに小さく手招きされた。

「幸姉ちゃん、食べないの？」

すでに食べはじめている弟が、かわいらしく首を傾げて聞いている。

「あ、ちよつとね。美奈さんに話があるから、ご飯残しといてよ」

「えー」

「のこしといてね」

「はあい」

ちえー、と合唱する弟・妹たちを尻目に、美奈さんの腕を引いて二階の部屋に行く。

ドアを閉めて促せば、美奈さんはすぐに口を開いた。

次の瞬間、私の頭は真っ白になった。

「あなたの引き取り手候補から、電話がきました」

変化は唐突です（後書き）

幸ちゃんびっくりです。唐突でしたからね、私もびっくりです
実は美奈さんたちの出番は、しばらくありません！

でもキャラが好きなので、どこかにまた出そうと企んでいます。

ふふふ……（怪しい）

次回更新は遅くなりそうです。

実はただでさえ忙しいのに短編小説を書き始めてしまいました…

…す、すみません……！

一ヶ月も出て来ない、なんてことはないと思うので、見てくださ
っている方、いらっしやっただなら気長に待っていてくだされば嬉し
いです……！ あ、感想もくださればもっと嬉しいです

では、季節の変わり目なので風邪などにお気をつけて！

ありがとうございました！

十月五日 訂正しました

複雑な予感です（前書き）

連載復活です！ が、早くもストックの危機到来&スランプの予感……。
が、がんばります。

複雑な予感です

「はじめまして。幸ちゃんだよな？ 今日からよろしくね」

チャライ人だな、が第一印象。

茶髪をワックスでつんつんに固めて、頭はまるでハリネズミ。耳にはピアス、首にはシルバーのチェーンをつけて、表情と年齢を想定できないサングラス。服は原色で、ちよつと派手め。

中身はチンピラっぽいのかと思いきや、結構フレンドリーでびっくりしてしまった。

「はい、よろしくお願いします、仲嶺さん」

「蓮さんって呼んでくれると嬉しいね」

「あ、はい、蓮さん」

やたらと親しげに話しかけてくれているチャラ男……じゃなくて蓮さんに、私は緊張がほぐれてゆくのを感じた。うん、気を使わなさそうな人でよかった。

だって、彼が私の引き取り手だからね。

今日から私は、仲嶺家にお世話になる。

といつても突然知り合った人と、独り立ちするまで暮らせるわけがない。ので、今回はお試し期間の半年間だけだ。

しばらく一緒に過ごして問題なければ、正式に仲嶺家の仲間入りをする。

……なにか色々すつ飛ばしている気がするけど、まあ、決めたのは美奈さんだから、きつと大丈夫なのだろう。

熱烈な”いつてらっしゃい”に送られた私（ちよつと泣きそうになった）は、いま車に揺られて仲嶺家へ向かっている。

仲嶺家はたんぼぼ院から車で小一時間ほどかかる、町はずれにあ

るそう。ちょっと遠いけれど、帰れない距離ではない。

あ、中学校は転校になった。さすがに歩きでは遠いから。そういえば、転校先はなんという学校なのかまだ知らない。

「あの、蓮さ」

「ん？ どうしたの幸ちゃん？ ああそっか、まだ家族構成を言うてなかったね」

「……あ、はい」

……蓮さんに聞こうと思ったけれど、聞けそうにないようです。まあいつか。

「うちは僕と、保護者がわりの姉と、高校生と中学生の弟ふたりと、双子の妹。あ、中学生の弟は幸ちゃんと同い年かな」

「そうなんですか。……あれ、ご両親はおられないんですか？」
言ってから、ハツと口をふさぐ。

もしかしたら亡くなっているのかも知れないのに、なんてことを！
けれど蓮さんは笑って、いや違うよと言った。

「僕らは血のつながり無いからね。親はそれぞれ。一緒には住んでないよ。どっちかっていうと僕らは、うーん、同棲？ 寄せ集めの詰め合わせみたいなの？」

「……は？」

答えになっているような、なっていないような。

新しい我が家（仮）は、なんだか複雑かもしれません。

複雑な予感です（後書き）

次回は蓮さんのお家と家族（一部）が登場します！

ありがとうございました！

新しい家族です ? (前書き)

幸ちゃんの新しい家族、登場です!

新しい家族です？

「お……つきいですね」

「はは、まあね」

大きいです、家が。とつても。

六人家族（？）プラス私が住んでも部屋が余ることは目に見えているほど、とにかく大きい。一般民家で三階建てとか初めて見た。

「ほら惚けてないで、早く入って。全員に紹介するから」

「え、あ、はい」

いつの間にかドアのところへ移動した蓮さんが手招きをしていたので、慌てて走る。

中に入ると、思った通り広がった。うわあ広い。うわあ。

感動していると、たくさんあるドアのひとつが開いて、ひよこりと人が顔を出した。

「あ、お帰りいレン。その子が幸ちゃんかな」

「ただいま命みこと。そうそ、このかわいい子が幸ちゃん」

いやいやかわいい子って、と突っ込みつつ礼をして「よろしくお願ひします」といえば、「いい子じゃん」と頭を撫でられた。顔がちよっと赤くなる。

だって命さんイケメン！ 爽やかイケメンというのだろうか、とにかくキラキラしている感じ。

中性的な顔で、女性にも男性にも思える。けれど流れ出るオーラがイケメンです。どこことなくインテリっぽい雰囲気も。天から二物を授かったよう。

神さまってば理不尽だなあと考えていると、命さんは上にあがっていった。

「スー、フー、タツキーにイツキー！ さっさと下に来なさい新入りだあ！」

命さんの叫びのあとで、複数人のドタドタという騒々しい足音。
……命さん、なんかボスみたい。ラピ？タのおばあさんみたいな
トタタと真つ先に駆け降りてきたのは、小学生くらいの女の子た
ち。シンメトリーとはこの事かと感心するほどそっくり。一卵性な
んだね。

「はい、スー&フーが一番乗り。自己紹介しな」

「す、水、です」

「風っす！ よろしくっす幸姉！」

「よ、よろしくね、水ちゃん風ちゃん」

おどおどしている水ちゃんと、なんだかパワフルな風ちゃん。正
反対で面白いなあ。仲良くやれそう。

「命オ、さっきなんか言っ……誰その子」

「あ、今日から半年お世話になります、幸いです」

次に、黒縁眼鏡をかけて、寝起きなのかもしれないと寝癖だら
けの男性が降りてきた。研究者さんかな？

半目で降りてきた彼は、自己紹介する私を見るなりカツと目を見
開いて、命さんの両肩を掴んで揺さぶった。

「おおおい命さんんん！？ いくら人材が足りないからって誘
拐はあかん！ 犯罪だめ！ こんな捻くれてないピュアな子をど
こで捕まえてきたんや返して来なさい！」

「タッキー、待て待て落ち着け。どーどー」

「落ち着けるかあああ」

「……えーと？」

なにこの状況。

「タッキー、前にちゃんと話したよ？ 新入りはいるよって」

「え」

「また聞いてなかったね？」

「……… すんませんした」

いつの間にやら話は終わったらしい。

タッキーさん？ が命さんにぺこんと頭を下げたから、咳払いを

してこちらに向きなおる。心なしか頬が赤い。

「あー、幸ちゃん？ すまんな騒がしくしちまって。俺は辰紀たつき。研究者みてえなことやってんだ。よろしく」

「研究者という名の自宅警備員な」

「違ちがうわ黙れ蓮のボケえ！」

「フリーターでしょ」

「それもちゃうよ命さん！？ …… って、あ」

辰紀さんが口をふさぐ。あれ、なんで？

「辰紀さ、関西弁を気にしてんの」

こっそりと蓮さんが耳打ちしてくれて、疑問解消。なあんだ。

「えーとこれはその」

「方便っていいですよね」

「へ」

「私、生まれは関西なんですよ。でも関西弁がわからないので、今度教えてください」

「……おう、任せとき」

慣れないフォローだったから、遠回しの「気にしないで」が伝わってしまったかも知れないけど、辰紀さんが関西弁で笑ったからよしとしておこうかな。

新しい家族です？（後書き）

ほのぼのと自己紹介のターンです。

あと一人は次回！ ……ですが、スランプ突入です。あうあう…

…。
頑張り、ます……がくつ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0847x/>

能力者少女の受難

2011年10月29日20時07分発行